

三好地域における周年いちご産地育成

ねらい

三好地区（三好市、東みよし町）は、平坦地での「冬春いちご」と、高冷地での「夏秋いちご」を組合せて「いちご周年栽培」が可能な全国でもめずらしい産地です。しかし近年、生産現場では、①高齢化の進行と新規参入障壁の高さによる担い手の減少、②夏期の異常高温による品質・収量の著しい低下という二つの深刻な問題が発生しています。

これらの問題に対し、地域一体となって戦略的に解決を図る新たなアプローチとして「にし阿波いちごタウン構想」を立ち上げました。

活動地域・対象

地域：三好市・東みよし町

対象：水の丸苺生産組合、いちご就農希望者

普及活動の目標

新規参入者の確保 環境制御技術の普及
「にし阿波いちごタウン」のファンの獲得

目標に向けた活動概要

1. 「にし阿波いちごタウン構想コンソーシアム」の設立
地域の課題を共有しながら、円滑な事業遂行を行うため、地元生産者、農業生産法人、資材メーカー、JA、行政からなる「にし阿波いちごタウン構想コンソーシアム」を令和6年4月に設立しました。
2. 新規就農者支援制度の充実
いちご新規就農へのハードルを下げるため、移住就農のイメージを明確にして就農意欲を高める「にし阿波いちごインターンシップ制度」と、就農時に必要な技術と知識を身につける「にし阿波いちご塾」を実施しました。
3. 周年いちご経営モデルの高度化と生産力強化
三好地域におけるいちご栽培技術を向上し、周年いちご経営モデルを確立させるため、現地講習会を実施しました。また、特に問題となっている夏秋いちご栽培では、CO₂局所施用機器の導入実証を行い、猛暑下での生産力強化を図っています。
4. 地域ブランド確立に向けた産地プロモーション活動の展開
「にし阿波いちごタウン」の認知度を向上させ、地域内外からファンを獲得するため、SNSを活用した情報発信、オリジナルマスコットとロゴマークの作成、地元小学校への出前授業及び地域イベントへの出店等の戦略的なプロモーション活動を実施しました。



(図1) コンソーシアム設立会の様子



(図2) 夏秋いちご栽培でのCO₂局所施用機器の導入実証



(図3) マスコットキャラ「トベリー」(左)とロゴマーク(右)

普及活動の成果

1. 計画的かつ質の高い就農支援の実現

インターンシップ制度の実施により、県内外から7名の就農希望者が産地に訪れ、具体的な移住就農体験を実施しました。

また、いちご塾を開講し、地元出身の4名の塾生を受入れることで、スムーズな技術習得と就農支援を実現することができました。



(図5) 生産者と一緒に作業するインターンシップ参加者

2. 栽培課題の明確化と技術支援の強化

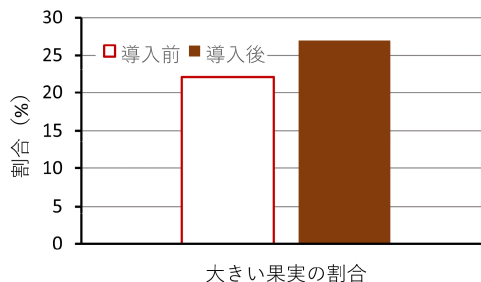
水の丸地区での現地講習会を通じて、①給液・排液のpH、EC確認の不徹底、②効果的な遮光方法の理解不足の2点が

共通課題であることが明確になりました。この結果を受け、当センターでは、それらの課題解決のため、月1回の溶液検査や日射量計を使った遮光率の算出支援など、より課題に直結した技術指導を実施しています。

3. 猛暑下における生育の安定化と品質の向上

夏秋いちご栽培におけるCO₂局所施用機器を試験導入実証した結果、猛暑時期でも生育が旺盛に維持され、果実のサイズの向上も確認されるなど、安定生産に向けた良好な結果を得ることができました。

今後も引き続き効果の検証と普及を進めていきます。



(図4) CO₂局所施用による果実の肥大効果

4. 「にし阿波いちごタウン」のファン獲得

積極的なプロモーション活動の結果、産地の認知度が飛躍的に向上し、リピーターの増加にもつながりました。地域内外の消費者に向けた「にし阿波いちごタウン」のファンの獲得に成功しています。

今後の発展方向

これまでの取組を踏まえ、担い手の確保と経営の安定化、地域ブランドの確立に向けた取組をさらに加速させていきます。

今後は、観光農園やパッケージセンターなど、就農希望者と消費者の双方が「にし阿波いちごタウン」の魅力を感じることができる新たな交流・生産拠点の整備を進めます。これにより、地域経済への波及効果を高め、「周年いちご産地」としての揺るぎないブランド確立を目指します。

関係者からの声

生産者：新技術の導入や新規参入者の確保などの支援を幅広く熱心にも実施してもらえて感謝しています。

農業生産法人：「にし阿波いちごタウンプロジェクト」の立ち上げにより、地域内だけでなく、地域外からの問合せも増えて、盛り上がっているのを感じています。今後も継続的な支援をお願いしたいです。